

61.

大石田に迎えられて一巻の連句を巻くとき芭蕉は時候の挨拶を発句に現した。それが、

五月雨を集めて涼し最上川

であった。客人として座敷の涼しい気分を述べるのが挨拶である。その後急流を下航して涼しを早しと改めているが、それは連句の場合よりも自由に対象を受け止めた実感にぶつかった故である。最上川の本領をつかんで奥の細道に採録した。

さて六月の季語を解題しよう。

病葉——わくらばと読む。夏の青葉に混じって変色している葉のことで葉が病みついたという意か。また常盤木落葉がある。冬に落葉しないで新しい若葉と交代して落ちるのは夏である。

時鳥——古来詩歌に詠まれるが、六月ごろは甲高い声で鳴き血を吐くなどといわれる。

昔の人は郭公と時鳥とを混用したが、両者の鳴き声は違う。カッコーとひびくので閑古鳥とも言われ、淋しい感じがする。とにかく六月は多くの鳥がいる。ポンポンと鳴く筒鳥や十一というように聞こえる十一やブッポーと鳴く仏法僧もいて夜間でも耳にすること稀ではない。

62.

昔から詩歌に「季のもの」と言われていた。季節を表す事物を指す。また俳諧では「季題」と言い季のものを詠む題目となして行われた。

現在は題目を与えてもらって詠むのではなく、自由なテーマのもとに季語を含めて詠む傾向になったので「季語」と我々は呼ぶ。例により季語解説にうつる。

雹（ひょう）——雷雨に伴って氷塊の降ることがある。農作物を荒らされるのを雹害という。歌に氷雨（ひさめ）ともいわれたりするが俳句では霰とか冷雨に氷雨を用いている。

落し文——軟らかい潤葉樹の葉を几帳面に小さく巻いているのがある。褐色に枯れているゆえ発見し易い。これは小虫の卵が葉に巻き込まれたもので時鳥の落し文…と優雅に名づけている。あたかも時鳥の季節と合うからだろう。

蚤（のみ）——蚤虱馬の尿する枕許…と芭蕉の詠んだ蚤は、戦後生まれた人には蚤の痒さなど理解されるのだろう。昔は生活の中に忘れられぬ存在だった。

63.

時代の変遷は自ずから季語にも影響を及ぼして廃れる季語が生じるし更に新しい季語の登場が現れる。

季語は独断で製造されるのではなく、一般の共感から通用されていくものであろう。日本文化として現代廃れた季語も抹殺せず遺しておく方がよいと思う。また新しい季は乱立しやすいけれどもよく精選して後代に伝えていく価値を持たせたいと偏に念願する。

次に季語解説にうつる。

赤富士——富士山が赤く染まって珍しく望めることであるが、俳句では夏季とする。主に甲斐側は夏の早暁に生ずる現象で素晴らしい日の出の反映である。

優曇華（うどんげ）——注意して見ないと目につかぬ微かな毛の如きもの。実はクサカゲロウの卵だが、障子や電燈の笠などに発見する。昔から迷信があり、不吉の前兆という人もあり逆に善兆とかつぐ人もある。

四万六千日（しまんろくせんにち）——面白いことばと思う。有名なのは浅草観音の七月十日の縁日である。この日に参詣すれば四万六千日も参詣した大功德を授かるというので別名功德日と称されている。東京では青鬼灯の市が立つ。